



繁殖記録がある県は、実は少ないミサゴ

魚食性の猛禽類であるミサゴ *Pandion haliaetus* は、日本では亜種ミサゴ *P. h. haliaetus* が全国に生息していますが、北海道や東北では主に夏鳥、南西諸島では冬鳥です(日本鳥学会, 2012)。また本州でも繁殖が未確認の県も多く(茨城、栃木、埼玉、千葉、神奈川、山梨、岐阜、奈良。(渡辺靖夫ら, 2012))、準絶滅危惧種とされています。

一方香川県では、1960年代には既に繁殖しており、「海岸地方に多い」とされています(岡内英孝, 1968)。しかし1970年代にはマツ枯れによる営巣木の減少から激減し、香川県レッドデータブックでも準絶滅危惧種とされました(香川県環境・水政策課, 2004)。ただ近年は、内陸部への分布拡大や、鉄塔など人工物での繁殖もあり(川口敏, 2001)、明確な比較データはないものの、増加傾向もしくは過去よりは多い個体数を維持しているようです(高松市屋島でのコロニーにおける16巣の記録(川口敏, 2004)など)。



▲ミサゴ PHOTO©古市幸士

なぜ香川県のミサゴは増加(または個体数を維持)しているのか?

まず営巣場所の面からは、人工物への営巣が大きいと考えられます。ただし人工物の巣は保安のために防除される可能性も高く、やはり自然の営巣木の育成・維持が重要です。ミサゴの巣は代々利用されることも多く、北アメリカでは最高125年連続使用されて記録があるそうです(森岡照明ら, 1998)ので、好環境である屋島のコロニーを、それぞれの営巣木も含めて維持することが重要です。

採餌面では、ミサゴは水面近くの魚を発見して急降下、捕獲するが、悪天候などで魚が水面まで上がらないと齧歯類や両生類を捕獲することもあり、水の汚濁はミサゴが減少する一因であるそうです(森岡照明ら, 1998)。そうすると逆に、穏やかな瀬戸内海や浅いため池が点在する香川県では、ミサゴが捕獲可能な水面が多いと考えられ、これがプラスに働いていると考えられます。

実際に、屋島での調査(3巣での5~8月)ではウマヅラハギ41%、ボラ35%、フナ属19%という結果があり(馬場智子, 2005)、沿岸の個体も淡水魚を捕獲していることが分かります。また個体数を維持するためには、特に冬季の餌の確保が重要であり、内陸部への拡大も考慮すれば、特にため池を利用する個体の餌を調査する必要があると考えられますが、そうした調査はありません。これは今後の課題でしょう。

- ・馬場智子, 2005. 香川県高松市屋島におけるミサゴの食性. 日本鳥学会誌 第54巻1号, 日本鳥学会
- ・香川県環境・水政策課, 2004. 香川県レッドデータブック 香川県の希少野生生物
- ・川口敏, 2001. 人工物におけるミサゴ *Pandion haliaetus* の営巣例. 日本鳥学会誌 第50巻4号, 日本鳥学会
- ・川口敏, 2004. 香川県東部地域におけるミサゴ *Pandion haliaetus* の営巣場所. 日本鳥学会誌 第53巻1号, 日本鳥学会
- ・岡内英孝, 1968. 香川県に於ける野鳥の生態
- ・森岡照明ら, 1998. 図鑑 日本のワシタカ類
- ・日本鳥学会, 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会
- ・渡辺靖夫ら, 2012. フィールドガイド日本の猛禽類 vol.01 ミサゴ